

海外学生派遣事業 終了報告書

文化科学研究科 地域文化学専攻 友永雄吾

海外派遣国：Australia

海外派遣先大学：La Trobe University & The University of Melbourne

海外派遣期間：2006年6月15日より2ヶ月2週間



写真（バルマ森林のレッドガムの大木）

報告書内容

1 海外派遣先大学について

1. La Trobe University（以下、ラ・トロブ大学）は1967年に設置され、ヴィクトリア州で3番目に古い国立大学である。アボリジナル研究に関しては、「Aboriginal Studies」と称する研究科が文学部内に設置されており、その他の研究科（大学院レベル）や学部と連携を図り学際的研究が実施できる。また、Ngarn-gi Bagora Indigenous Centre がバンドゥーラ・キャンパス内（メルボルン市内より約25km北部に位置する）に設置されており、アボリジナル研究に関する学問の機会を創出するとともに、市民社会にも開かれ、広く貢献している。講師陣には、社会科学部に一名のアボリジナル女性客員研究員がいる。
2. The University of Melbourne（以下、メルボルン大学）は1853年に設立された、オーストラリアでthe University of Sydneyに次いで2番目に古い国立大学である。アボリジナル研究に関しては、「Australian Indigenous Studies」と称するコースが文学部の人類学、地理学および環境学研究科の中に設置されており、学部課程から博士課程までの学生を受け入れている。また、当研究科に限らず、政治科学研究科や文学研究科など多くの研究科でもアボリジナル研究を専攻できる。また、本コースに従事する研究者の過半数は、アボリジナル当事者であり、かつ博士課程修了者である。本大学には、the Centre for Indigenous Education（先住民教育センター）が設置されており、アボリジナルおよびトレス海峡諸島民の学生を中心に利用されている。
3. 上記派遣先大学に加え、今回の調査、特にフィールドワークを実施するに当たり重要な諸機関や地域に関する説明を以下に示す。(1)Koori Cultural Heritage Trust、(2)Aboriginal Advancement League、(3)Bangerong Culture Center、(4)Golburn Ovens River TAEF、(5)Cumeragunga Village、(6)Cumeragunga Land Council、(7)Yorta Yorta Nation Land Council、(8)Darunia Cultural Center、

(9) Yanbina Vocational Center がある。

- (1) Koori Cultural Heritage Trust (以下、KCHT) は、1985年にメルボルン市内でクーリー文化を保護、促進するため設置された。2004年以降、その規模は以前の3倍ほどに拡大され、ヴィクトリア州からの財政援助も増加した。建物は3階建てで、1階部は、現在活躍中の若手アーティストの絵画や写真などが、月代わりで展示されている。また、入り口付近にはギフトショップがある。建物奥には図書館が完備され多くの貴重な資料や行政文書が保管されている。2階部はヴィクトリア州42のアボリジナル集団に関する歴史や文化を時系列に区分し、音声や映像効果を駆使しながら展示されている。加えて、1階と同じく特別展示点を実施するための2スペース、学生や市民対象にアボリジナル文化を学ぶ講演会などを実施するためのレクチャー・ルームが1つ完備されている。3階部は、貴重なアボリジナル・アートの保存・修復場所と保管室が設置されている。また、文化センター職員の事務所だけでなく州政府との関係が強いオーラル・ヒストリー・プログラムやヴィクトリア州警察との関係を密接にするためのジャスティス・プログラムなどの事務所もある。
- (2) Aboriginal Advancement League (以下、AAL) は、クメラグンジャ出身でヨルタ・ヨルタグループの一人であった、Doug Nicholls氏を中心とするアボリジナル当事者により1958年にメルボルン市北部に位置するThornburyにて結成された。今日、周辺アボリジナルの憩いの場所、年一度開催されるNIDACウィークの会場、葬式場、さらに、雇用、就学、インフラに関する相談など様々な役割を果たしている。
- (3) Bangerong Culture Center (以下、BCC) は、1975年にシェパトンの郊外(メルボルン市内より北へ約350Kmの場所に位置するおよそ6万の人口を有する都市)に設置された文化センターを兼ね備えた博物館。アボリジナルが運営する博物館としては初めて建設されたもの。以前は世界各国の著名な建造物のミニチュアを建物以外の敷地内に建設していたが、今日、都市開発のため、それらは撤去されている。センター内部は、バンガロン集団に限らず、ヴィクトリアのアボリジナル集団全般に関する歴史や、槍、楯、果物皿などの伝統的な生活用具、儀礼や生活様式などの模型が展示されている。2階部には周辺アボリジナル集団に関する少量の文献資料と書籍が所蔵されている。また、Golburn Ovens River TAEFのアボリジナルに対して開港されている特別クラスの開催地として週1回利用されている。
- (4) Golburn Ovens River TAEF (以下、GO 専門学校) は、シェパトンの中心部に位置し、都市最大の専門学校。専門学校に加え、ラ・トロープ大学の分校が2階・3階に組み込まれている。現在、特別クラスとして、先住民の人々にはKoori Unit、移民の人々にはMulticultural Studiesが開講されている。前者には、1. 将来専門学校で教えることが出来る特別教員免許取得コース。2. 自動車修理技術を中心に習得するオート・メカニック・コース。3. アボリジナル・アートを学ぶコース。4. ナーシングのコースが設置されており、それぞれ、certification1から4までの専門免許書が修了生に授与される。
- (5) Cumeragunga Village (以下、クメラグンジャ) は、1881年にニュー・サウス・ウェールズ州植民地政府のリザーブとして設置され、1953年に閉鎖された。1959年、一部の土地が返還される。1966年以降、本地域は99年間の自由所有地としてアボリジナル居住者へ返還される。現在、リザーブは25戸の住居が設置され、約80人の居住者がいる。また、公共施設として、集会場、協会、診療所(Vanny Morgan Health Care Center)、ランド・カンシル(Cumeragunga Land Council)等が建設されている。
- (6) Cumeragunga Land Council (以下、CLC) は、1983年にニュー・サウス・ウェールズ州土地権法が制定され、99年の自由所有地として返還されたさい、クメラグンジャに居住するアボリジナルに対し、雇用、教育、インフラ整備に関する最終決定を下す主要機関として設置された。
- (7) Yorta Yorta Nation Land Council (以下、YYNLC) は1999年に再編された。全身の機関として、1983年、Yorta Yorta Local Land Councilが、ニュー・サウス・ウェールズ州土地権法1983(Land Rights Act NSW)に基づき設立する。その結果、クメラグンジャ・リザーブが自由保有地として返還された。また同年、ヴィクトリア州土地保護カウンシルとの交渉により、土地、海、文化遺産およびそれらの補償に関する問題を扱うYorta Yorta Tribal Councilが設定される。1989年、当カウンシルに変わりYorta Yorta Clan Groupがその機能を拡大し、1999年には本グループがYorta Yorta Nation Land Councilへと変わった。
- (8) Dalnia Culture Center (以下、DCC) は、バルマ森林に1985年代に設置されたヨルタ・ヨルタの人々により運営されているセンター。Dalniaとはヨルタ・ヨルタの言語でレッドガム(ユーカリの木の種類)を意味する。このセンターでは、ヨルタ・ヨルタ集団に関する言語、生活習

慣やバルマ森林の環境に関する学習会、その他さまざまなイベントが実施されている。

- (9) Yanbina Vocational Center(以下、YVC)は、ヨルタ・ヨルタ集団が1994年にヴィクトリア州・ニュー・サウス・ウェールズ州ならびにその他諸機関や団体を相手取って、植民地以前より保持してきた大地との関係を意味する先住民権原を法の下で争い、その結果として2000年に建設された。本センターは2002年に先住民権原訴訟が敗訴に終わり、一度閉鎖されるが、2003年より再開し、現在は1 . Aboriginal Art class、2 . Local & Land Management class、3 . Cross Cultural Pass way class をバルマとクメラグンジャ居住のアボリジナルの人々を中心に開講している。

2 海外派遣前の準備

受け入れ大学の選定に関しては、それほど困難を伴わなかった。というのも、私は、2001年よりラ・トロープ大学の社会科学研究科文化人類学専攻(修士課程)に在籍し、2003年に当専攻を修了したためである。その際、主任教授であったJohn Morton教授(現在、Aboriginal Studies主任研究員および社会科学研究科Senior Lecturer)と副主任教授であった杉本良夫教授(現在、本大学の客員研究員)に大変お世話になった。今回の海外派遣事業に関しては両教授からのご支援がもたれている。準備段階において、John Morton教授と社会科学研究科の研究科長であるDavid De Vouse教授より派遣受け入れの許可書を郵送していただいた。また、リサーチ実施中は、ラ・トロープ大学の多くの施設利用の許可をいただいた。特に、研究用途に合わせ図書館、コンピューターさらにはファックスの利用を許可していただいた。さらに、8月下旬、私自身が大阪の部落コミュニティー(同和地区)で生まれ育ち、これまで関与してきた部落問題や差別に関する講義の機会を与えていただいた。メルボルン大学に関しては、1998年からご指導を受けているLillian Holt氏(2005年まで本大学副学長フェロー)の紹介で2003年にWayne Atkinson教授(ヨルタ・ヨルタ・アボリジナルの出自を持つ政治科学研究科Senior Lecturer)と知り合う。彼がメルボルン大学の学生を対象に自らのカントリー(ふるさと)であるバルマ森林へ招待し、歴史や文化を共有する目的で開催しているカルチャー・キャンプに昨年の6月に参加して以来、多くのご指導を得ている。海外派遣前の準備段階では、派遣先大学として、メルボルン大学より受け入れの承認はなかった。しかし、メルボルン到着1週間後にWayne教授に挨拶をするため大学訪問したさい、Wayne教授が所属する政治科学研究科博士課程に在籍する学生だけが使用できる院生室の使用許可をいただいた。このため、コンピューター、インターネット、プリンターを自由に使用することが出来るようになった。

フィールドワーク実施のための準備としては、総合研究大学院大学、文化科学研究科地域文化学専攻へ文献資料調査を中心に発表・提出したりサーチ・プロポーサルの資料に基づき計画した。そのさいの主要なテーマは、下記のものである。

2001年のセンサスによると、アボリジナル総人口の70パーセントが人口1千人以上の地方都市と10万人以上の主要都市に居住している現状が明らかになっている。よって申請者が注目するのは、「伝統指向型の生活」を営むアボリジナル集団ではなく、伝統的な慣習、家族システム、言語をほぼ失った地方や主要な都市で生活を営む南東部のアボリジナル集団である。こういった状況にありながら、申請者が調査を希望するヨルタ・ヨルタとバンガロンを中心とする集団は、かれらの本来の領域において植民地がはじまる19世紀中葉から今日まで土地権運動を継続してきた。なかでも1994年から2002年まで行われたヨルタ・ヨルタ先住民権原訴訟は、ヴィクトリア、ニュー・サウス・ウェールズ両州をはじめ約500機関に対抗して起こされた。この先住民権原訴訟はヨルタ・ヨルタを中心とする集団の敗訴に終わるが、2004年にヴィクトリア州との間で土地と河川の利用に関する共同管理を合意する。本研究は、この運動の形成過程について、なぜ伝統的な要素を喪失した当該地域を中心に居住するアボリジナル集団が土地権にこだわってきたのか、どのようにして運動は実践されてきたのか、その運動は周辺住民や政府との間でいかに受け取られてきたのか、という問題に焦点を当て、周辺のアボリジナル集団や白人人口の多い白人オーストラリアとの関係から明らかにしてゆく。これらのことを明らかにするため、ヨルタ・ヨルタを中心とするアボリジナル集団を構成する個々人の日常の文化復興に関わる実践が創出した運動の内実に注目する。このような点から、本研究は、これまで注視されてこなかったオーストラリア南東部アボリジナルの現状を歴史的、政治的な観点より正確に把握し、土地権運動を通して生み出されてきた文化の内実を明らかにすることで、先住民と白人オーストラリアの将来的展望を考えるための貴重な研究になると考える。

現地の調査許可に関しては、2005年のカルチャー・キャンプに参加したさいに知り合った、ヨルタ・ヨルタおよびバンガロン集団の知人とメールを中心に文通し、クメラグンジャやバルマでの約1ヶ月半のフィールドワークの許可を承認していただいた（これら知人の中には、現在クメラグンジャやバルマに居住する人はいなかった）。

ビザに関しては、オーストラリアは、入国ビザの取得が求められ、一度発行されると発効日より1年間有効となる。しかし、滞在に関するビザについては、特定の目的を持ち大使館を通して移民局より承認されれば1年間の特別滞在ビザが発行される。この場合、商業ビザとして発行されることが一般的である。このため、長期滞在を希望する者は、31歳までのワーキング・ホリデー・ビザもしくは学生ビザを取得することで1年以上の滞在ビザを取得することが一般的である。今回は3カ月以内の滞在であったため、通常の旅行ビザ（3ヶ月間有効）でカバーできた。

3 海外派遣中の勉学・研究

[メルボルン市内、郊外を中心とする調査]

6月16日にメルボルンに到着。当初1週間は、市内ユースホステルにて滞在（16-25：内17-18はバック・パッカーにて宿泊。料金は約40,000円）。次いで、7月上旬まで友人宅で滞在（6月25日-7月3日。宿泊料は無料）。その後、7月8日まで同ユースホステルにおいて滞在（宿泊料11,000円）。メルボルン市内と郊外における調査の主題は、私が研究対象とするヴィクトリア州北中部に点在するヨルタ・ヨルタおよびバンガロンを中心とするアボリジナル集団とメルボルン市内・郊外に点在するアボリジナル集団との関係を明らかにすることである。1930年以降、貧困から逃れ仕事を捜し求め、アボリジナルの人々は都市部を目指しヴィクトリア北部の小都市より南下した。そこで、1960年代に、私が今回の研究調査地として重点をおくクメラグンジャ出身でヨルタ・ヨルタであるDoug Nicholls氏を中心にAboriginal Advancement League（以下、ALL）が創設された。現在、彼らの子孫がメルボルン市内、郊外を中心に居住しており、このALLは、かれらの紐帯を確認する重要な役割を果たしているといえる。したがって、今回はALLの役割を概観するための調査を中心に決行した。

具体的には、メルボルン市内のKCHTと郊外のAALを中心に調査を開始した。とりわけ、前者のセンターでは、資料リサーチを中心に実施した。また、私が2001年より当センターの会員であり、2001年から2003年にかけて、ボランティア活動もしていたため、スタッフの多くは私のことを理解してくれており、後者のセンターのスタッフを紹介していただいた。このようなご紹介があったため、後者のセンターでは、どのような手続きもなしに、以下3つのイベントに参加することが可能となった。

- (1) エルダー（コミュニティーより尊敬される年配のアボリジナル男性・女性）への昼食会でウェーターとしてボランティア活動を実施した。
- (2) ファミリー・フェスティバルへの参加。
- (3) 葬式（私が2001年から2003年までKCHTにてボランティアをしていたさいにお世話になった、Lisaが41歳の若さで夢の世界へと旅立った。彼女は修士号を持った専門フォトグラファーであり、また、オーストラリア国内外を縦横しアボリジナル権利回復運動に尽力した女性活動家でもあり、年配アボリジナルと次世代アボリジナルとの対話の機会を創出することに多大な貢献をしたリーダーでもあった。彼女のご冥福をお祈りします）

その他の調査として、オーストラリア先住民族の文化や歴史を共有するためのイベントNIDACウィークに参加した（7月2日から9日まで開催）。その1イベントであるヴィクトリア州のアボリジナル代表チームと警察代表チームが対戦するオーストラリアン・フットボールのゲームを観戦すると同時に、ビデオ撮影もした。さらに、7月7日にメルボルン市内の中心街で実施されたNIDACマーチへ参加した（マーチへの参加者はアボリジナルが8割近くを占め、総勢1千人ほどのもので、“always was, always will be, Aboriginal Land”という言葉を生高に唱え、世論に訴えた。マーチ終了後はアボリジナル非営利団体の代表者、メルボルン市、ヴィクトリア州政府代表がNIDACウィークに対する祝辞を述べ、多くのアボリジナルバンドによるコンサートが開催された）。

写真（NAIDACマーチ）



[ヴィクトリア州とニュー・サウス・ウェールズ州の境界周辺を中心に点在する小都市およびアボリジナル・コミュニティの調査]

7月8日からメルボルンより350キロ北上した場所に位置するバルマへ赴く。そのさい、自賠責保険が含まれている中古車を6週間レンタルする(費用約95,500円)。宿泊先としてバルマ・キャラバン・キャンピング・パークに約5週間滞在(7月8日—8月12日。宿泊費約83,000円)。本調査を実施する中で、多くの困難に直面した。まず、調査実施地に居住する知人がほとんどいなかったことである。バルマとクメラグンジャ周辺で居住しているアボリジナルで唯一私が面識のあったのは、DCCに勤める、Hilda Stewartさん、シェパトンのBCCで勤めるKevin Atkinson Jr氏の父Kevin Atkinson Sir氏のみであった。まず、Hildaさんと面会し、彼女からYYNLCの職員を紹介してもらおう。次いで、クメラグンジャに住むAtkinson Sir氏と会うため、Atkinson Jr氏と顔合わせをし、仲介役をしていただくようご依頼した。しかし、Sir氏と会合を持つことができたのは調査も後半にさしかかった8月に入ってからのものであった。クメラグンジャでの調査は、Sir氏と会うまでの間どのような知人の援助も無く一人で決行しなければならなかった。そこで、クメラグンジャに設置されている診療所の職員やパートの人々と知り合いになり、実態調査やインタビューをすることになった。ひとつのエピソードとして、「車にまつわる問題」があげられる。クメラグンジャへの3回目の訪問で、診療所職員ならびにその他スタッフと初顔合わせをした後、宿泊先へ帰宅するため車のエンジンをかけようとしたところ、エンジンがかからない。バッテリーが切れたのでは、と考えたのではあるが、1週間ほどしか乗っておらず、またライトを長時間きり忘れて放置した覚えも無い。仕方なく、診療所の職員へ事情を話し、助けを求めた。エンジンをかけるために何度も格闘する職員ではあったが、どうすることもできなかった。そこで、RACV(Royal Automobile Club of Victoria)という車の保険や緊急修理を受け持つ会社(日本のJAFFのようなもの)に依頼することを考えたが、当会社は会員制で一度に1万円以上の費用がかかる。そこで、ある職員の勧めもあり地元の修理工にまず頼むこととなった。5分もしないうちに、バルマから修理工の男性が駆けつけ、彼がエンジンをかけて見ると、1分もかからない内に、もの見事に車から快音が響いた。この出来事があったためか、次回からクメラグンジャを訪問すると、多くのアボリジナルの人々から「Japanese with Car problem(車の日本人)」と呼ばれることになった。この事故(?)が起きるまで、クメラグンジャの住民より警戒の眼差しで観察されていた私ではあったが、それ以後、当該地域の訪問にそれほど抵抗を感じる事が無くなり、調査を順調に進めることができた。バルマに居住するアボリジナル集団の調査に関しては、YYNLCを中心に調査を実施することになった。殊に、当センター職員よりYVCで開講されているクラスへの受講を許可してもらおうことになる。結果、センターや職業訓練所のアボリジナル個人へインタビュー調査を実施することが可能となった。また、クメラグンジャとバルマに限らず、当該地域より70キロ南下した場所に位置するシェパトンでの調査も実施した。本地域での調査は、Kevin Atkinson Jr氏のはからいもあり、クメラグンジャやバルマと比べるとスムーズに実施することができた。

主な調査としては、次のものがあげられる。

- (1) クメラグンジャ、バルマ、シェパトンに居住するアボリジナルの人々へのインタビュー調査とりわけ前者2地域では、非アボリジナルの人々へもインタビュー調査を実施(アボリジナル:男7、女4・非アボリジナル:男2、女3)
- (2) クメラグンジャに設置されている公的機関(以下、公)と独立行政法人(以下、独)での

聞き取りおよび参与観察。まず、ランドカウンスル:CLC(公)での聞き取り調査(内容:雇用、教育ならびに国勢調査に関する質問)。ついで、ヘルスケア・センター(独)への聞き取り調査(内容:健康、診療施設の活用状況と機能に関する質問)。さらに、キンダー・ガーデン(独)での聞き取り(育児、進路、教育に関する質問)。クメラグンジャ周辺アボリジナルの人々にゆかりのある地域をバンガロン文化センター:BCC 職員である Kevin Atkinson Jr.氏の付き添いにより訪問(埋葬地、キャンピング・サイト、カヌー・コースター・トゥリー、墓地 etc...)。

写真(蛇行するマレー川)



- (3) バルマに設置されている公的機関(以下、公)ならびに独立行政法人(以下、独)を中心とする聞き取りおよび参与観察。まず、YYNLC(公)での聞き取り調査(内容:雇用、教育ならびに国勢調査に関する質問)。ついで、ヤンビーナ職業訓練所のクラス見学、参与観察(アボリジナル・アート・クラス:2回、ローカル&ランド・マネージメント・クラス:5回)および聞き取り(学校設立の歴史背景、目的など)。さらに、製材会社での聞き取り調査。内容は、伐採地と先住民との関係を中心とする質問。森林保護に従事する仮雇い職員とボランティア職員の調査に同行。その内容は、バルマ森林に生息するレッドガム伐採地であるクープの確認および伐採規定(直径1メートル以内で高さは2メートル以上)違反行為の探求であった。

写真(ヤンビーナ職業訓練所の入り口)



- (4) シェパトンでの聞き取りおよび参与観察。まず、BCC での聞き取りおよび参与観察(内容:歴史、雇用、教育ならびに国勢調査に関する質問)。ついで、GO 専門学校のクーリー・ユニットの見学と参与観察(アボリジナル・アート・クラス:5回)および聞き取り(学校設立の歴史背景、目的など)。さらに、ルンバララ・フットボール競技場にてオーストラリアン・フットボール、ネットボールの見学とシェパトンの地方裁判所におけるアボリジナルに対する特別裁判(クーリー・コート)の傍聴。シェパトンの1小学校に設置されているアボリジナル学生への特別学級(マネガ)の見学と聞き取り調査(内容:学校設立の背景、目的など)。

最後に、上記で示したいくつかのイベントのビデオ撮影を実施した。

- (1) 雇用：BCC の 1 職員が従事する下水道設置のさいのインスペクションに関する仕事の撮影。
- (2) 教育：YVC のローカル・ランド・マネージメント・クラスと GO 専門学校のクーリー・ユニットのアボリジナル・アート・クラスの撮影。
- (3) 余暇：オーストラリアン・フットボール、フィッシングならびにボート・トリップの撮影。

[メルボルン市内での勉学と研究]

8 月 12 日から 28 日までメルボルン市内のユースホステルにて滞在（空きベッドが無かったため 8 月 15 日にチャップマン YHA からメトロ YHA へ移動。宿泊費チャップマン YHA が約 10,500 円。メトロ YHA が約 33,000 円）。8 月 28 日から 31 日までフランクストン（メルボルンより約 120 キロ南下した場所）に住む友人宅にて滞在（無料）。帰国前夜はメルボルン国際空港近隣のホテルにて滞在（ホテル 71：宿泊費約 7100 円）。

バルマとクメラグンジャを中心とするフィールドワーク終了後、メルボルン市内へ戻ると直ちに次の 3 つのことに取りかかった。

- (1) 来年より実施予定の長期調査のための資金を得るため、オーストラリア政府から募集されている 2 つのエンデバー・アワードへの申請書を作成（締め切り日：8 月 25 日と 31 日）。
- (2) 今年末にシドニーにて開催される国際学会（the borderpolitics of whiteness）での発表原稿の概要を作成（締め切り日：8 月 30 日）。その題目は「Urban Aboriginal Challenges in Australian society」。内容は、今回の調査で自らも生徒となり参与観察した、職業訓練所と専門学校の実践に基づき、いかにアボリジナルの人々が主流社会に対し、その存在を維持し、また文化を継承しているかを明らかにしようとするもの。
- (3) 8 月 31 日にラ・トロープ大学で発表する部落差別問題に関する発表原稿資料を作成した。

これらの資料を作成するにあたり、John Morton 教授と Wayne Atkinson 教授より貴重なアドバイスをいただいた。また、YHA 滞在中に偶然お会いすることになったシドニー在住の元ジャーナリストで、退職後もオーラル・ヒストリーの研究補助員としてご活躍されている女性 Dai さんのご助言も得ることができた。このように大変恵まれた環境の中で資料作成が出来た。さらに、メルボルン大学では、8 月 16・17 日と 24・25 日に Wayne Atkinson 教授が受け持つ「Indigenous peoples & colonization」と「Indigenous Peoples & the State」の講義を受講した。各助成金、奨学金に関する申請書さらに国際学会発表のための概要資料は全て締切日前に提出することが出来た（9 月 5 日、国際学会事務局より連絡があり、私の発表が許可された）。

写真（メルボルン大学のキャンパス内）



4 海外派遣中に行った勉学・研究以外の活動

8 月 29 日に、フランクストンに住む友人の依頼で、彼女が日本語教師として働く Overport 小学校にてボランティア・デモンストレーターとして 8 クラスを受け持つことになった。当日は「Japanese Day」という年に一度の大きなイベントが開催されていたため、急遽私が助っ人として抜擢されクラスを担当することになった。クラスの対象学年は 1 年生から 6 年生までで、内 6 クラスは、日本の伝統として知られる絞り染めをトレーシング・ペーパーを使い生徒に体験してもらおうクラスであった。他 2 ク

ラスはおにぎりの作り方を教えるクッキングのクラスであった。また、帰国前日の8月31日にラ・トロープ大学にて、development studies を専攻する学部生4名と社会科学研究所の大学院生2名を対象に「Buraku problem in Japan: Buraku liberation Movement in the past, present and future」と題する講義を行った。学部生のうち2名はアフリカ移民の学生でソマリア、ケニアを祖国に持つ。また1名は福岡出身の日本人留学生で中学生時代よりニュージーランドへ留学をしていたため当該問題に関して殆ど知識を有していなかった。その他3名はオーストラリア人(アングロ・ケルト系)の人々であった。アフリカの学生は「職業と世系に基づく差別」として部落問題に類似する差別構造が現存していることを教えてくれた。また、オーストラリアのアボリジナルとも社会的、経済的、政治的な状況で類似した現状にあることを多くの学生から指摘された。ともあれ、日本で私が直接的、間接的に抱える問題をオーストラリアの学生と共有できたことは、今後の私の研究にとって大きな財産となった。

写真(講義の状況)



5 海外派遣費用について

日本—メルボルン間の渡航費は一年間オープンの格安チケット約12万円を購入した。また、宿泊費はバルマ・クメラグンジャでの調査をするさいに、近隣に格安ホテルが無かったため、バルマ・キャラバン・キャンピング・パークにて滞在することとなった。しかし、私の研究趣旨をオーナーに伝えたところ、一日約4500円の宿泊費を約2500円に減額していただき、大変リーズナブルな値段でキャラバンを借りることができた。また、レンタカーを借りるさいも同様に研究趣旨を伝え、1日約3000円のところを約2000円にまで値引きしてもらった。具体的には、日本—メルボルンまでの渡航費が117500円。宿泊費が合計184935円。レンタカー代が95497円であった。また、生活費が約6万円。車のガソリン代が約3万円。それら全てのおおよその合計は487935円であった。これ以外の出費、例えば書籍代、マウンテン・バイクの装備品、交通費、携帯電話の購入とプリペイドカードならびに国際テレホン・カード代等は2005年から学生支援機構より貸与している奨学金を当てることになった。換算レートはオーストラリア滞在中、めまぐるしく変化したため、それぞれの変化に応じて計算した(範囲は1オーストラリア・ドル=86.455円~90.2円)。

6 海外派遣先での語学状況

授業、研究および日常生活においては英語が必須となる。北部・中部・南部オーストラリアの先住民コミュニティでの研究であれば、彼・彼女らの言語を使用することが求められる。しかし、私が受け入れていただいたヨルタ・ヨルタおよびバンガロン集団のコミュニティでは、集団固有の言語は皆無に等しく、現在50語ほどの単語しかが残っていない。したがって、固有言語の使用は求められなかった。海外派遣前のTOEFL、IELTS、TOEIC等語学試験は、3年ほど前から受けていないが、日常の会話はほぼ支障無く、また大学や専門学校での授業を聞き取るのにもさほど困難は無かった。ただし、インタビュー前の交渉時に自らの研究内容を口頭で伝えて許可を得るために第2言語としての壁を感じるが多々あった。これは、言語能力の問題が大きく関係している。しかし、それと同時に現状の把握さらには相手の社会的な位置の配慮など、交渉能力が重要となる。このため、いくつかの困難に直面した。特に、約束していた日時にインタビューを実施することができなかったことが、幾度となくあり、実際は偶然にインタビューを実施することができた回数の方が、予定していた回数よりも多くなった。

7 海外派遣先で困ったこと

なんと言っても問題となったのは季節が逆転することである。オーストラリア中部や北部であればさほどの変化は無いのであろうが、南東部、とりわけメルボルンは冬の真只中であつた。日中は14度から18度まで上がる日もあつたが、滞在期間当初は4度から12度までが平均であつた。このため、体調を整えるのに1週間を要した。この状況は、フィールドワーク実施地であるバルマとクメラグンジャにおいて更に厳しくなつた。というのも、当該地域は、オーストラリアでも唯一雪が積もり、スキーやスノーボードができる山々が連なるアルプス地帯に近く、明け方と夜中は気温がマイナス3度にまで下がる日もあつた。このため、体調管理には大変気を使った。特に暖かい白湯を朝、昼、晩できる限り飲むことを心がけ、消灯前にはできる限りうがいをすることを心がけた。ただし日中は14度から18度とメルボルン市内とさほど変わらず、快適に調査を実施することができた。

また、食べ物もできる限り野菜を十分に取るよう心がけた。当該地域はフルーツピッキングの産地としても知られているため、果物や野菜が豊富で、比較的手ごろな値段で購入できた。そのため、毎日の炊飯にかんする困難はなかつた。また、日本料理を作るための材料もいくらかは購入することができたため、食事に関する問題は殆ど生じなかつた。唯一の問題は、それら材料を購入する場所である。私が滞在していた宿泊施設から、最も近隣のスーパーマーケットまでは35キロ以上あつた。したがって、食料その他の買出しは、35キロ離れた小都市エチューカへ出る必要があつた。

買出しは、調査のため小都市へ出る必然性が無い場合、週一回にまとめて購入することにした。また、オーストラリアではセイフ・ウェイやコールズといった主要スーパーマーケットで30ドル(約2700円)以上購入すると、車のガソリン代が1リットル当たり4セント(3.6円)ディスカウントをしてもらえる特別クーポンつきレシートを得ることができる。このため、殆どの買出しは上記大手スーパーで済ますことになった。

バルマにおけるインターネットを利用する環境は、かろうじて確保されているものの、日本語にて送信されたメールを読むことができなかつた。もちろん、日本語にてメールを送信することもできなかつた。双方が出来る環境が整っているのは35キロ西北に位置するエチューカか70キロほど南下したシェパトンになる。このため、日本の友人への情報交換には不自由を伴つたが、研究や調査に関しては殆ど支障なく進めることができた。とりわけ、バルマにおいては、YVCか宿泊施設の事務所のインターネットとプリンターを無料で使用させていただいた。

また、メルボルン市内にて宿泊のさい、交通手段として役立つものとして、メルボルン大学学生より無料で寄付してもらつたマウンテン・バイクがある。通常、トラム(路面電車)、電車、バスでの移動は、2時間券(ゾーン1の学割90円、通常180円)、1日券(ゾーン1の学割180円、通常270円)を購入しなければならない。インターナショナルの学生に関しては学生割引が適用されないため、これら公的交通機関を毎日使用することになると相当な出費になる。したがって、マウンテン・バイクを利用することで本来ならば払わなければならない交通費を抑えることができ、さらに気分転換やエクササイズのためのツールとしても役立つため一石二鳥であつた。

写真(マウンテンバイクとメルボルン市の夜景)



8 海外派遣を希望する後輩へアドバイス

今回の海外派遣を振り返ってみると、3ヶ月という短・中期の滞在中、積極的または消極的に、多くの出来事に直面する機会を得た。このような機会とは、出発前、滞在中に調査の目的を常に意識化させ、何度も繰り返し計画を組み立て直すことによって創出され、獲得されたものであつた。しかしながら、計画の範囲内ではどうしても予期できない出来事が幾度と無く生じることもあつた。これは、社会の中で人間が持ち得る多様な「個」としてのダイナミズムが織り成す結果であり、むしろこのよ

うに予期せぬ出来事が生じることが日常生活そのものなのである。私もまたそのダイナミズムの真只中で、四苦八苦する存在として生活を営んでいたのである。

このように「偶然」と「直向な努力」との間で見え隠れしては生み出される人と人との関係に常に支えられた今回のフィールドワークは、何も私一人が感じるのではなく、海外の「文化」や「他者」を学ぼうとする学生、その他多くの方々にも当てはまるのではなからうか。今後、海外の「文化」や「他者」を学ぶため、本海外派遣助成金を希望される後輩の方々には、違いを出発点とする相対的な見方と、偏った先入観に基づき静的なものとして捉える本質的な見方との間を常に行き来しながら、「自ら」と「他者」の位置を常に意識化させることで、相関的に醸成される自らの文化や他者の文化、われわれとかれら、私と彼・彼女に対する見方や、それら双方のバランスを捉え、継続的な相互理解に努めていただきたい。この継続的相互理解の一步として、今回の海外派遣は、私にとって実り多きものとなった。

友永雄吾